

2. 包含層について

本調査地点では、①現場では遺構として調査したが、整理作業で包含層であったと結論づけたものが複数あった。また、②調査区南半部の下層調査では堅穴建物下層から同時代の土器が大量に検出されており、第4章基本層序では、堅穴建物下のⅡ層及びⅢ層上層の堆積にはあまり時間差がなかったとした。この2点をここで確認しておきたい。

①については、各遺構（落込み）の確認面と底面（床面）の検出標高を模式化したのが図40である。各遺構の確認面の層位は、Ⅱ-1層中に集中しており、遺構の掘り込みの底面はⅡ-2層上面～Ⅲ-5層である。北から南へ向けて若干傾斜しているので、確認面も南に位置する遺構の方が低くなっている。ところで、検出の状況をみても、落込みとしたSK3、SK7はSI2の壁で焼土や炭化物が検出されたために、当初は遺構と判断されたが、平面形は捉え難く、覆土を追って平面形を確定したとした。近接した場所で切合って構築されているのも不自然である。出土遺物はあるので、遺物を含む層がこの周辺に存在したと考えた。また、北側の地山（岩盤）際から堆積するⅢ層の土が多様であるために、その中の層を見誤ったと考えるのがSK6、SD1である。これらには土器、焼土や炭化物の人工物等は含まれないが、覆土の土と同じ土が掘り込みの壁外まで続いている。特にSD1は平面形と断面形がいわゆる溝の範疇には入らない。なお、SD1の平面形をみると、西端はSI4掘方に続く可能性があることも付記しておく（SD1とSI4の底面の標高は7.85～7.90mでほぼ同じであり、SD1とした包含層の土がSI4の掘方であった可能性もある）。ここで、東壁土層断面をみると（図40）、Ⅲ-1～5層は水平堆積ではなく、南端近くになだれ込んでいるような堆積を示す。土は砂岩粒・ブロックを多く含む暗褐色土系である。特にⅢ-5層は砂岩粒・ブロックを大量に含んだ明褐色土である。砂岩粒・ブロックは地山（岩盤、もしくはその近辺の層）由来と考えられるが、塊状となっており、人為的な地山の切り崩しや移動があった可能性がある（地山の自然の崩落はあったかもしれないが）。想像を逞しくすれば、丘陵裾部に位置する本調査地点は選地の際に地ならしをして、平地を造成して生活空間が確保されたのではないかと考えるし、その際に砂岩ブロックが形成されたとも思われるのである。また、落込み内にも土師器、須恵器が出土していることから、生活面も想定される。さらには、Ⅲ-1・2層中では弥生土器が集中して50点以上も出土しており（図40の「弥生土器集中出土地点」）、近くに弥生時代の堅穴建物が存在した可能性もある。

②下層調査で掘削した範囲は、調査区南半部にあたる（このうち上層調査で掘削を終えていた南端部の溝は除く）。下層調査時の層位毎の土器の集計は第5章第3節2.に記載した。奈良・平安時代の堅穴建物の構築層の下層であるⅡ-2層以下の層でも同時代の土師器、須恵器が大量に出土している。この遺物の出土のあり方は、①の上層調査の遺物の出土状況と似通っている。ここでも、下層調査のⅡ-2層より上層の土層とそれより下層のⅢ-1・2層までの形成には長い時間はかからなかったと推測しておきたい。①では層の形成（盛土）には人為的な関与があった可能性もあるとしたが、下層でも同様の解釈は可能である。それと、時代はかなり下るが、近代の軍需工場造成の際の土層の攪乱等があったかもしれないと疑われるのである。

今回の調査では上記のような問題点が残った。今後の調査の検討を有する点としては、基本層序の見直し、遺物の出土層位を確定しての取り上げ等をあげておきたい。なお、自然科学分析のテフラ分析においても（第6章）、奈良・平安時代の堅穴建物の掘り込み層の下のⅡ-14・15層から延暦貞観スコリア（延暦21(802)年、貞観5(864)年）が検出されている。この分析結果からも、延暦貞観スコリアを包含するⅡ-14・15層の上層に平安時代の遺構の掘り込み層が存在することになる（ちなみにSI4からは延暦貞観スコリアは出土していない）。これは、本遺跡での今後の調査の大きな課題として残る。

3. 竈の構造、構造材について

本調査地点では、3軒の堅穴建物から4基の竈が検出された（うち1基は掘方のみ）。本遺跡周辺では、堅穴建物の検出例は少ないので、ここでは本調査地点の竈の特徴についてまとめておきたい。検出された竈はSI1が1基、SI2が2基、

SI3が1基であるが、SI2は新旧それぞれの床面に伴うもので、旧床面付属の竈は掘方のみであったので、使用面の復元は行い得ない。SI2の竈は新竈で話を進めたい。

3基の竈の年代は、出土遺物からSI1とSI2は9世紀後半と推定される。SI3は出土遺物が少ないが、SI1とSI2の竈と構造の類似点があるので同時代とした。3基共に9世紀で平安時代前期のものとしておく。

支脚の位置 SI1、SI2、SI3共に切石の支脚が使用されている。支脚の切石はいずれも多角形に面取りされた柱状のものである。3基共廃棄時の位置で出土していた。平面の位置は、SI2、SI3は竈の壁の延長線上にある。但し、隅竈であるSI1は東壁の延長上にある。SI2は支脚の下に岩塊があったために、支脚設置場所を穿って、窪みを作り、そこに支脚を立てている（竈内の支脚の設置場所は特定されているということになる）。

燃焼部内壁への切石の使用 SI1、SI2では壁外への掘り込みで支脚の両脇にあたる燃焼部内壁には切石塊が置かれる。SI2では多角形に面取りされた柱状の切石で、移築後の南壁の補強のためか、柱状切石は3本立てられている。SI1は塊状の切石で内壁構築土に混ぜ込まれているようだが、南側の切石塊は内面側は赤く変色していることから、直接火にあたっていた可能性がある。

壁外への掘り込み SI1は30cm、SI2は40cm、SI3は36cmを測る。また、燃焼部の幅は支脚設置位置で、SI1では73cm（切石塊間の距離）、SI2では62cm（柱状切石間の距離）、SI3では70cmを測り、ほぼ一定している。

袖 SI2では支脚の前方に焚口の天井石と思われる長さ34cm、幅と厚さ16cmの切石が床面上で検出されている。左袖のみ残存しており、この袖の長さは35cmを測る。他の竈穴では袖は検出されていない。袖の構築材は竈の崩落土に類似した材質であったと思われる。

このように特徴をあげてみると、切石の多用が目立つ。また、構築土には切石の石材と似る砂質の石材（土層説明では、砂岩粒・ブロックと表示）を他の上（暗褐色上、黒褐色上系の上）と混ぜ込んで使用している。

今回の調査地点は、地形的には沖積地から丘陵の縁辺にあたる。ここで陣出遺跡では初めて奈良・平安時代になって集落が検出された。その立地を改めてみると竈穴建物は、地山の裾の南側に隣接して構築されている。竈穴建物の覆土上層が削平されていることから、当初は地山も竈穴建物の覆土ももっと高くまで残っていたのであろう。竈穴建物が掘り込まれた土は褐色であり、水は漬かなかった場所に作られている。柏尾川の氾濫の及ばない場所を選地して集落が営まれている。調査範囲の南半部は科学分析の結果からは、平安時代初期までは河川からの砂が堆積する低湿地であったが、9世紀（延暦貞観スコリア堆積時）には草原のような環境であったとされる。下層調査では竈穴建物と同時期の遺物が大量に出土しており、ここが廃棄空間として使われていた可能性がある。SI2から石帯が出土していることから、ここの住人は官衛系の役割の方が強かったとも考えられる。中世以降の土地利用の頻度は低く、近代になっての大規模な盛土造成による軍需工場建設も、柏尾川の河道改修や氾濫原の耕地整理等を前提にしていたといえる。その意味では、中小河川の沖積地から丘陵地への変換点での土地利用の歴史を窺うことができた好例であったといえる。

〈 註 〉

1. 福島の学徒労働員を記録する会編 2010『福島の学徒労働員の全て』
2. この海軍工廠深沢分工場のこの地域でのあり方については、榊イビソク 2023『藤塚西やぐら群』に詳しい。
3. 松田磐余 1988「水害の変遷と浸水危険地域地図」『総合都市研究第35号』

【引用・参考文献】

角川地名大辞典編纂委員会編1984『角川日本地名大辞典 14 神奈川県』

神奈川考古同人会1983『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—』『神奈川考古第14号』

株式会社イビソク2019『天神山城—鎌倉市山崎字宮廻756磐8、756番19の一部地点—』

株式会社イビソク2023『藤塚西やぐら群』

鎌倉市教育委員会2023『大慶寺境内遺跡—寺分一丁目810番1—』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 令和4年度調査報告39（第2分冊）』

河野真知郎2015『鎌倉考古学の基礎研究』高志書院

宗臺秀明2019「鎌倉出土かわらの系譜と編年—東国社会の変質と中世の成立（前・後）」『鶴見大学紀要第4部人文・社会・自然科学編56』

特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所2024『第32回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』

深澤地区連合町内会 深澤地区鎌倉市合併60周年記念実行委員会平成20『深澤地誌資料』

松川磐余1988「水害の変遷と浸水危険地域地図」『総合都市研究 第35号』



1. 上層調査完掘全景 南から



1. S11 検出全景 南から



2. S11 完掘 南から



(上)3. S11 東西土層断面 南から



(下)4. S11 南北土層断面 東から



5. S11 竈遺物出土状況 南から



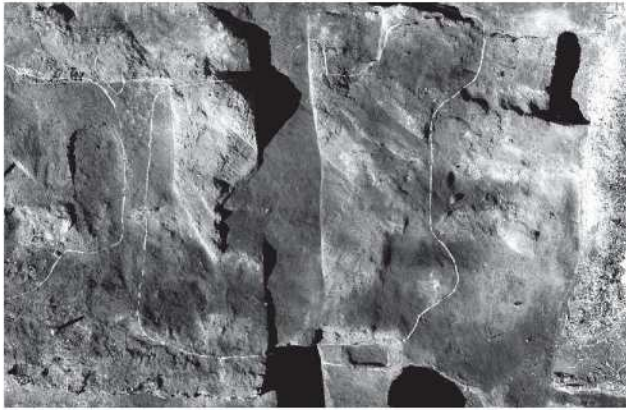
6. S11 竈南北土層断面 西から



7. S11 竈完掘 西から



8. S11 竈掘方 西から



1. S12 検出全景 南から



2. S12 床面完掘全景 西から



(上)3. S12 床面南北土層断面 西から



(下)4. S12 床面東西土層断面 南から



5. S12 石帯(図16-19)出土状況 東から



6. S12 竈検出状況 西から



7. S12 竈南北土層断面 西から



8. S12 竈遺物出土状況 西南から



1. S12 竈焚口周辺遺物出土状況 西から



2. S12 竈完掘 西から



3. S12 竈掘方 西から



4. S12 旧床面完掘全景 南から



(上)5. S12 旧床面掘方東西土層断面 南から



(下)6. S12 旧床面掘方南北土層断面 西から



7. S12 旧竈完掘 南から



8. S12 旧竈東西土層断面 南から



1. S12 旧竈掘方完掘 南から



2. S12 旧床面炉1検出状況 南から



3. S12 旧床面炉1灰検出状況 南から



4. S12 旧床面炉1検出の灰土層断面 南から



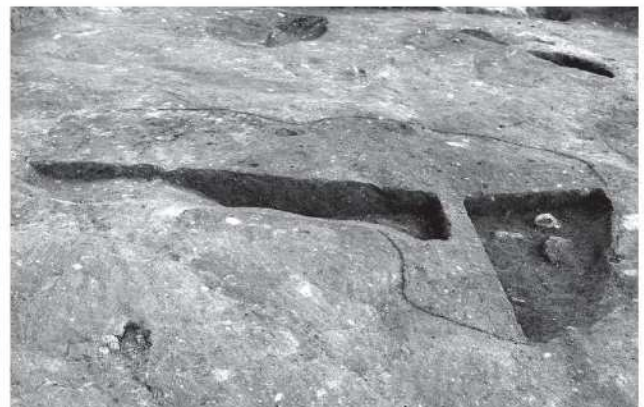
5. S12 旧床面炉1完掘 東南から



6. S12 旧床面炉1完掘2 西から



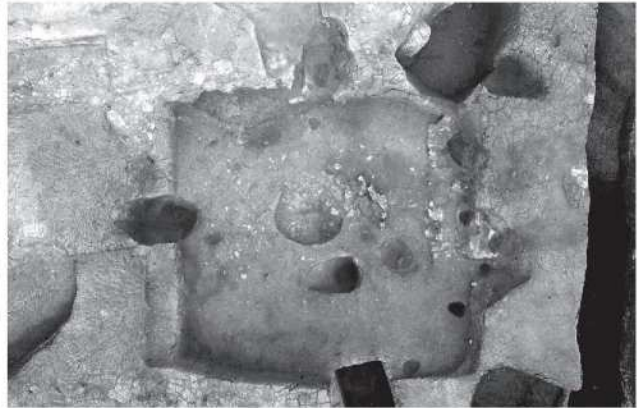
7. S12 旧床面炉1掘方 南から



8. S12 旧床面炉2南北土層断面 西から



1. S12 旧床面炉2完掘 南から



2. S12 旧床面掘方完掘全景 南から



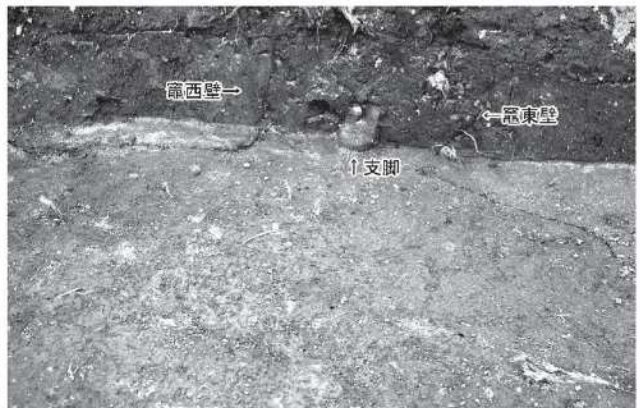
3. S13, S14 検出全景 南から



4. S13 完掘 南から



5. S13 竈検出状況 南から



6. S13 竈東西土層断面(試掘TP5拡張西②)検出状況 南から



7. S13 竈東西土層断面 南から



8. S13 竈完掘 南から



1. S14 完掘全景 南から



2. S14 東西土層断面(掘方含む) 南から



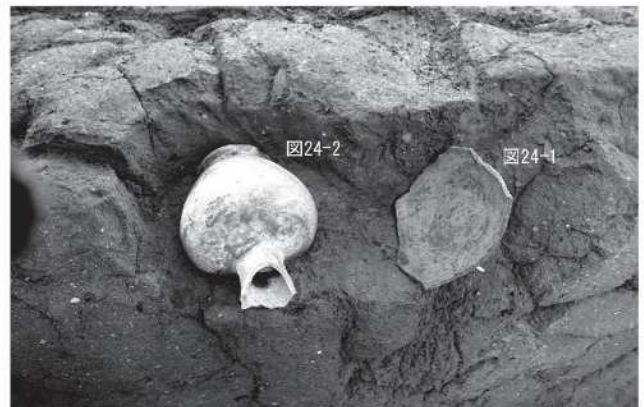
3. S14 土層断面 東から



4. S14 掘方完掘全景 西から



5. SK2 東西土層断面 南から



6. SK4 遺物出土状況 南から



7. SK4 南北土層断面 西から



8. SK4 完掘 南から



1. SK5 南北土層断面 東から



2. SK5 完掘 西から



3. SD1 (上)土層断面 西から
(下)完掘 西から



4. SK1 (上)土層断面 南から
(下)完掘 西北から



5. SK3 (上)土層断面 北から
(中)灰検出状況 東北から
(下)完掘 東から

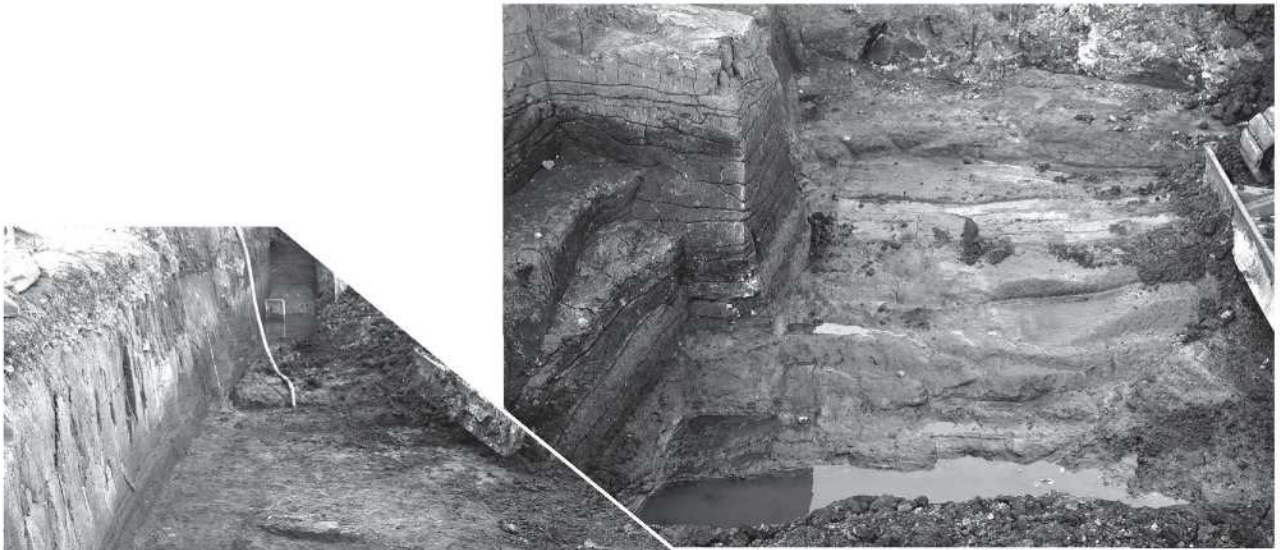


6. SK6 (上)土層断面 東から
(下)完掘 南から



7. SK7 (上)土層断面 南から
(下)完掘 南から





1. 下層調査 西半分完掘全景 南から

2. 下層調査 東半分完掘全景 北から



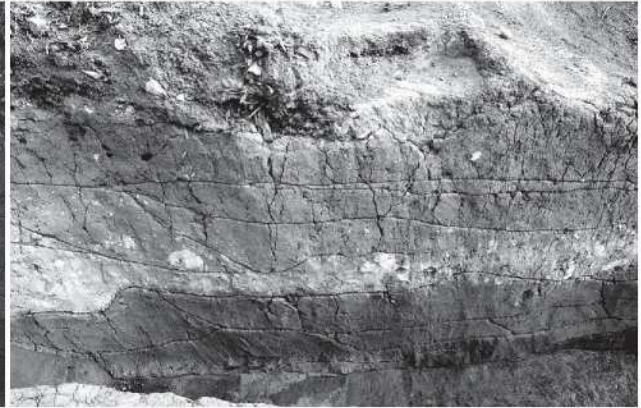
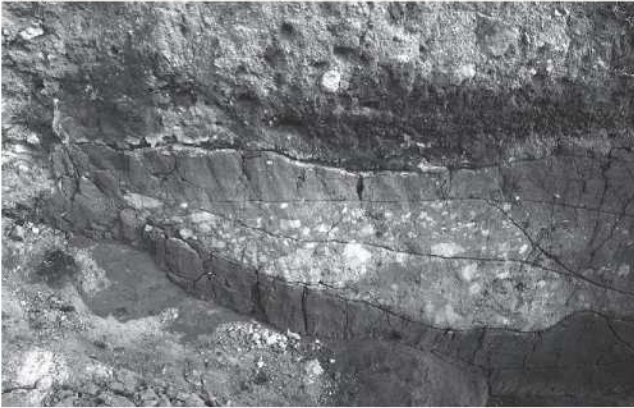
3. 下層調査 西深掘り区完掘 東から



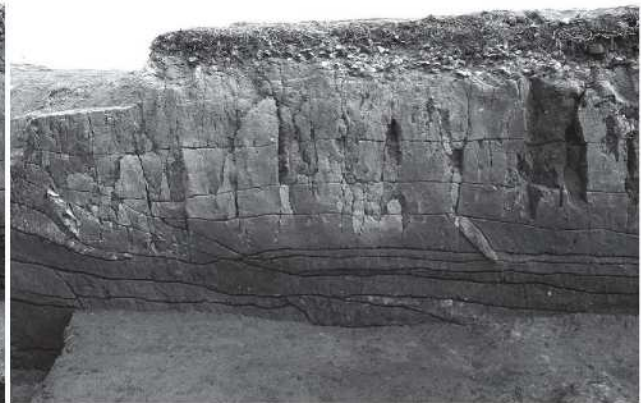
5. SK8 (上) 骨検出状況 西から
(下) 土層断面 西から



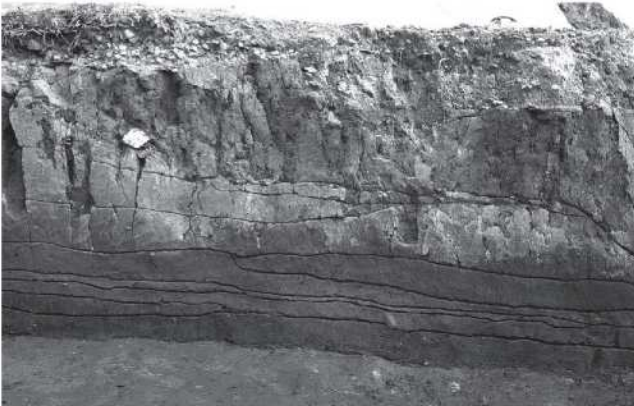
4. 下層調査 東深掘り区完掘 北から



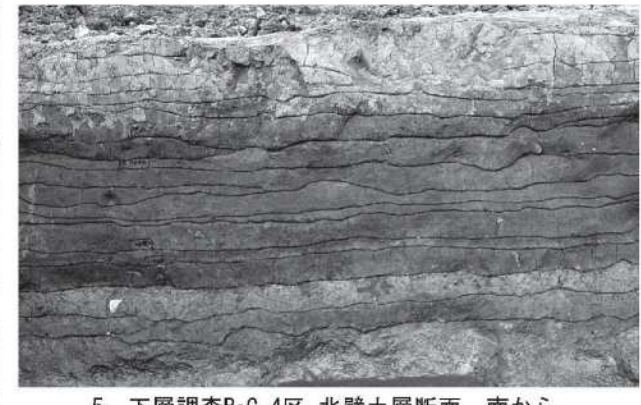
1. 調査区 東壁土層断面1(北端) 西から



2. 調査区 東壁土層断面2 西から



3. 調査区 東壁土層断面3 西から



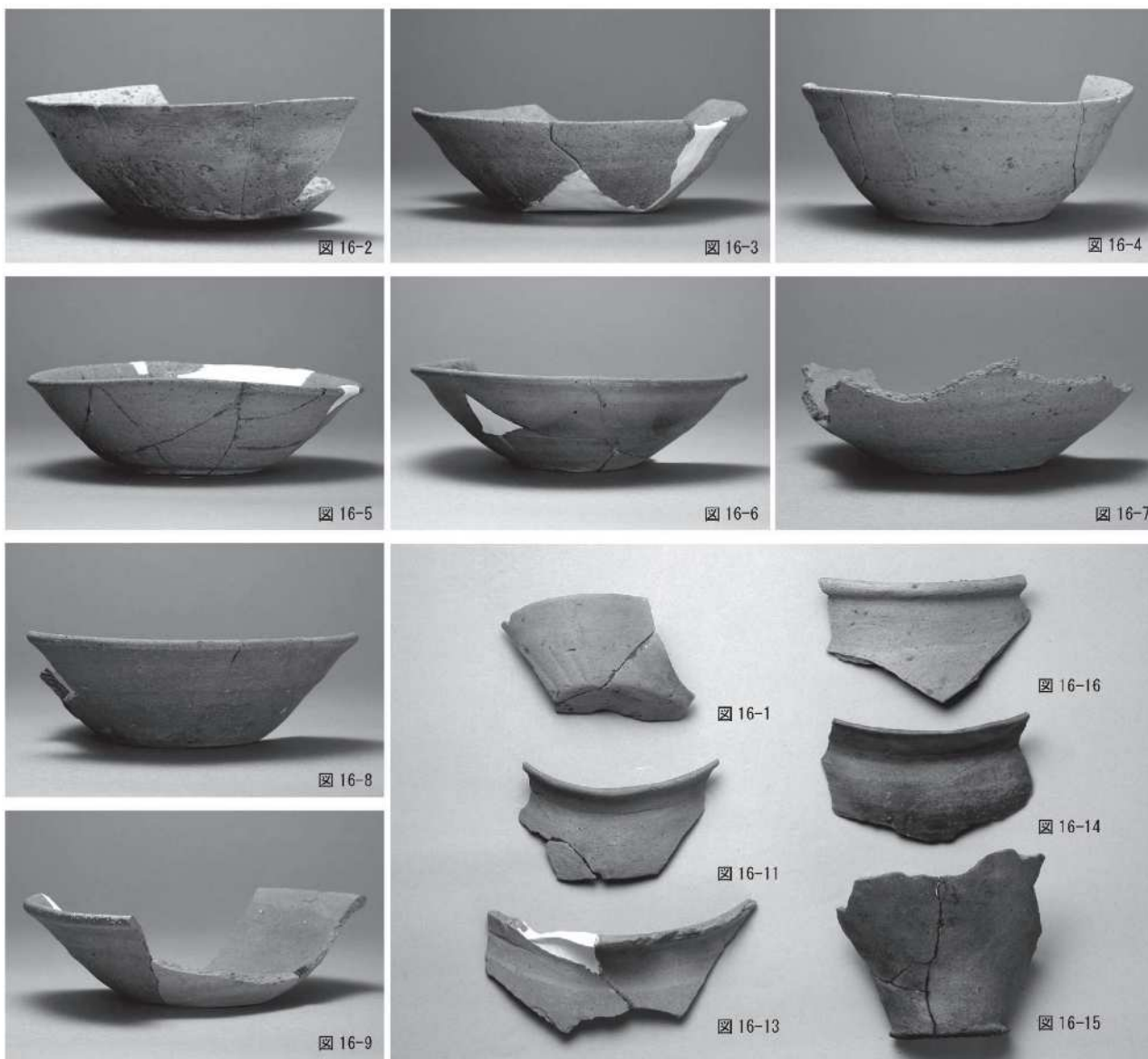
4. 調査区 東壁土層断面4(南端) 西から

5. 下層調査B・C-4区 北壁土層断面 南から

※分層線は図4・5基本層序と相違する部分がある。

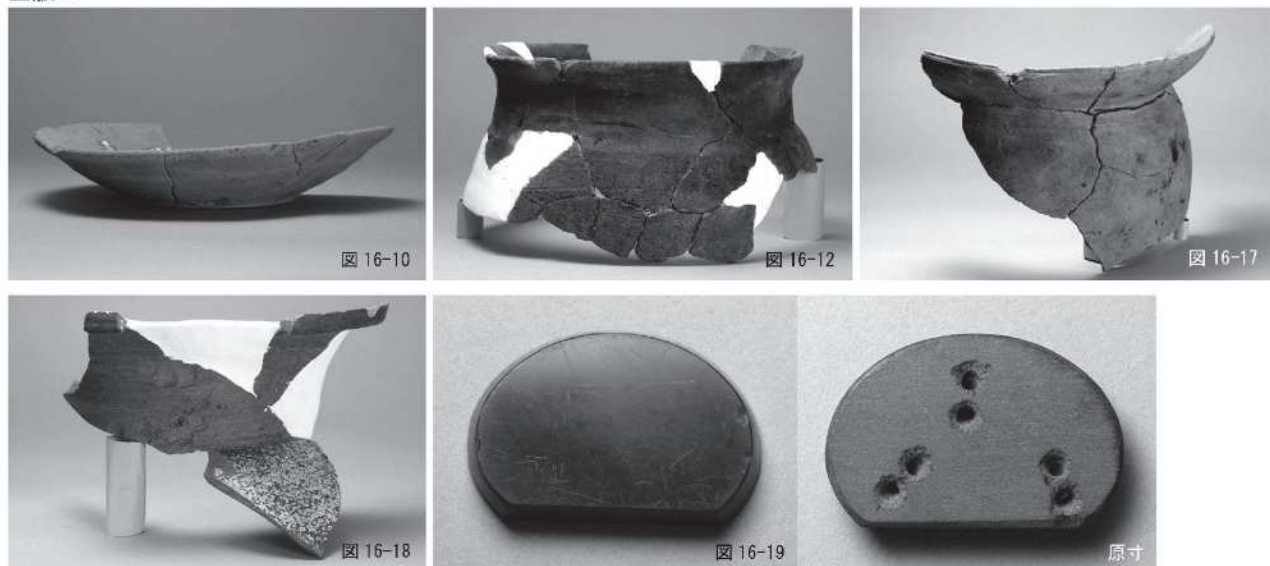


1. S11 出土遺物



2. S12 出土遺物1

図版12

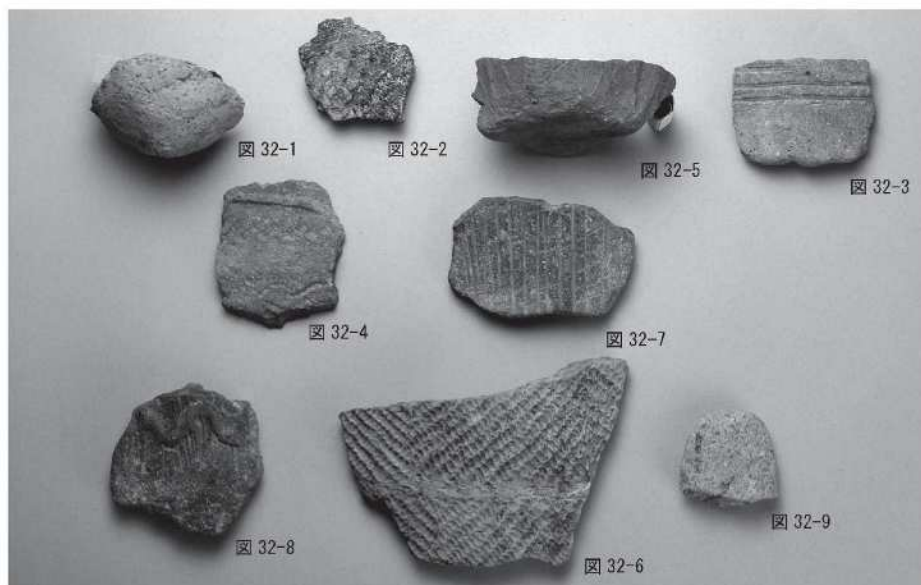


1. S12 出土遺物2



3. SK4 出土遺物

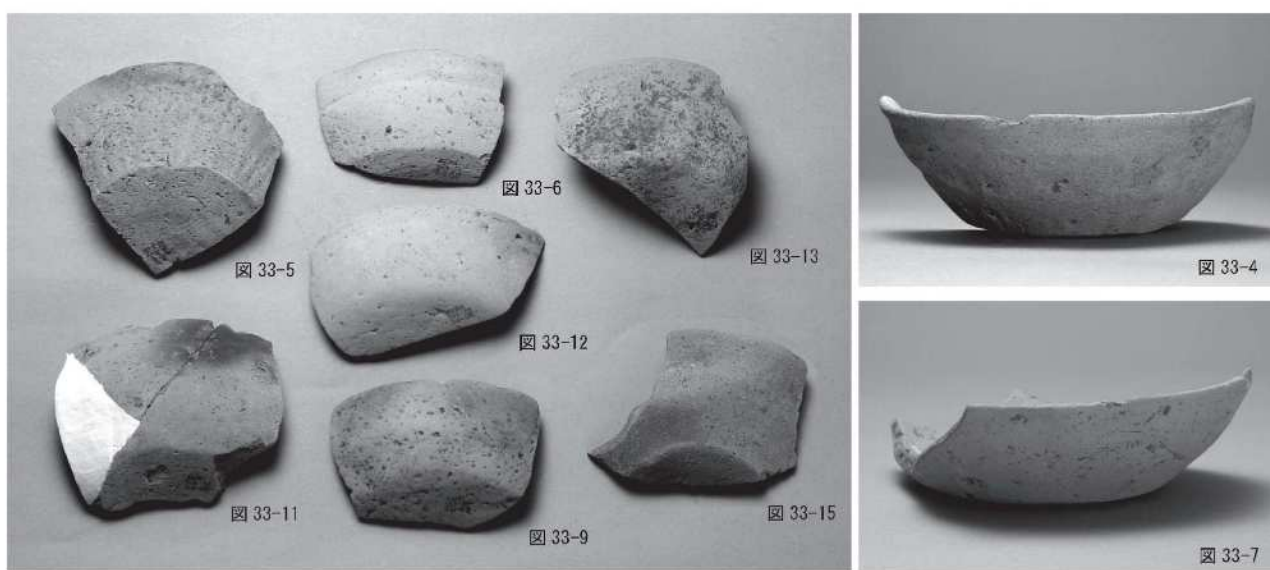
2. S14 出土遺物



4. 下層調査 出土遺物1 縄文土器・石器

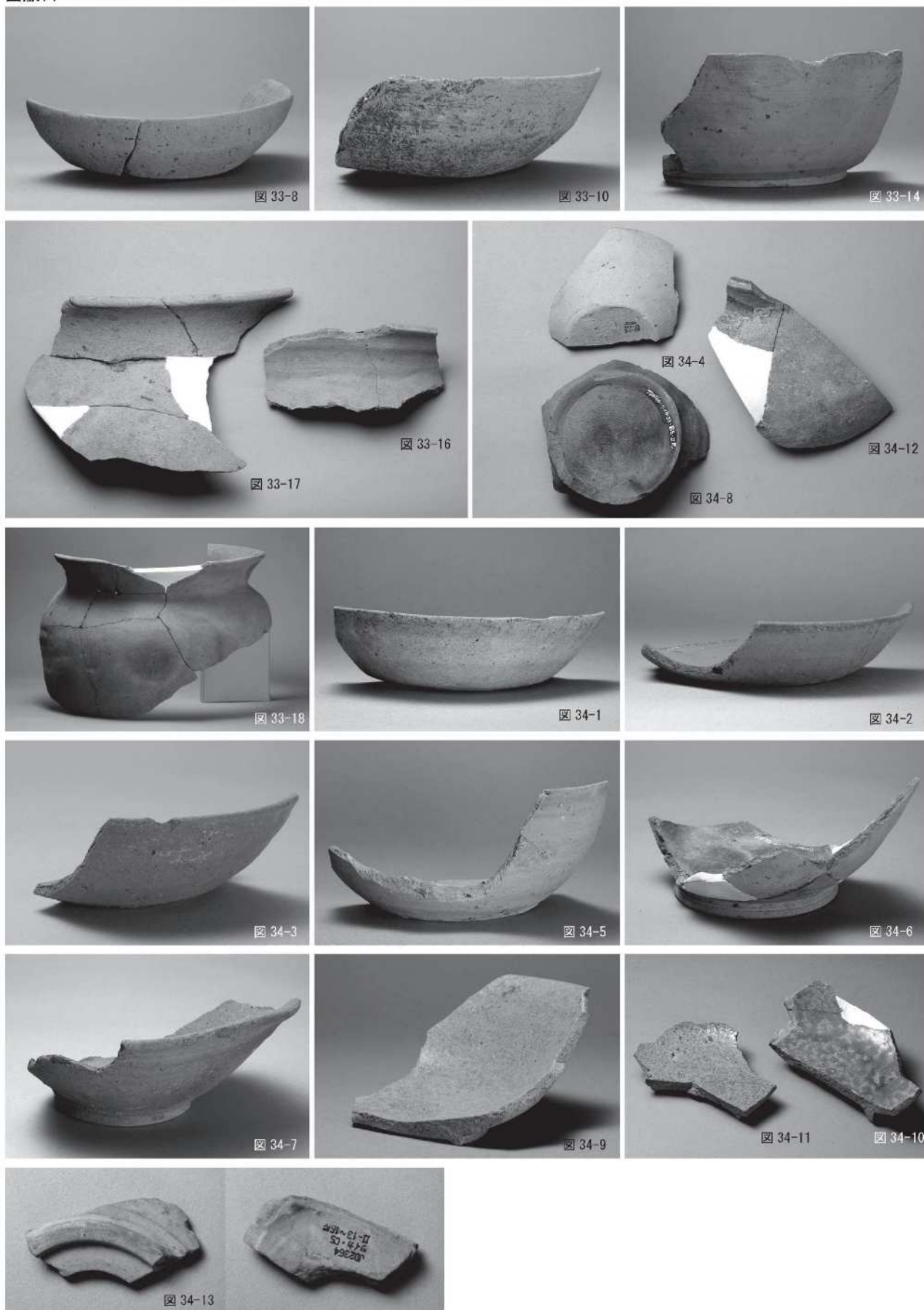


1. 下層調査 出土遺物2 弥生土器



2. 下層調査 出土遺物3 奈良・平安時代の土器1

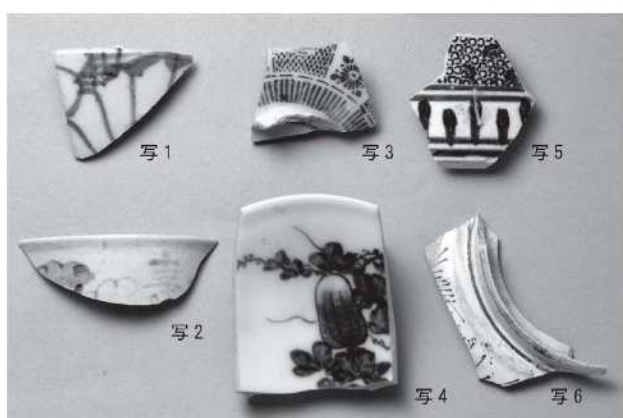
図版14



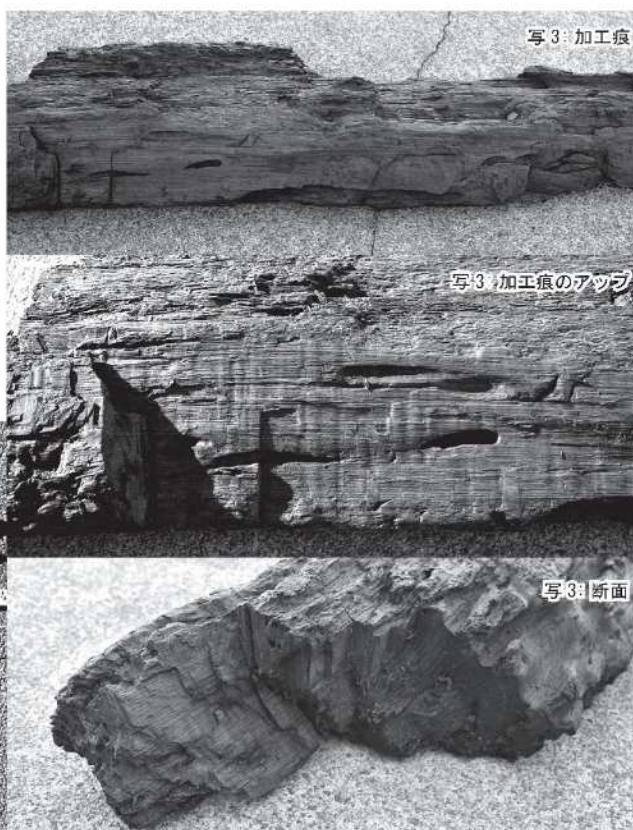
1. 下層調査 出土遺物4 奈良・平安時代の土器2



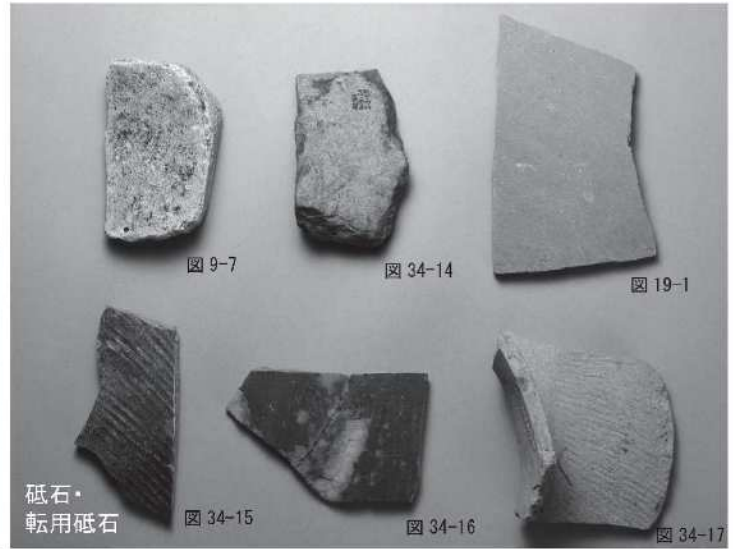
1. 下層調査 出土遺物5 中世



2. 下層調査 出土遺物6 近世～近代



3. 下層調査 出土遺物7 木製品・加工木材



1. 石製品



2. 動物遺体 SK8出土骨



3. 土製品



4. 近代の金属製品(犬釘)

報告書抄録

ふりがな	じんでいせきーかまくらしてらぶんあざかみじんで393ばんの11ほかてんー							
書 名	陣出遺跡－鎌倉市寺分字上陣出393番の11外地点－							
編 著 者 名	金森弘晃 玉城雄一 鈴木裕子 上本進二							
編 集 機 関	株式会社 イビソク 神奈川営業所							
所 在 地	〒252-0144 神奈川県相模原市緑区東橋本2-12-9 電話 042-703-1815							
発行年月日	2024（令和6）年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村遺跡番号		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
じんでいせき 陣出遺跡 かまくらしてらぶん －鎌倉市寺分 あざかみじんで ばん 字上陣出393番 の11ほか 11外－	かまくらしてらぶん 鎌倉市寺分 あざかみじんで 字上陣出 ばん のほか 393 番 11 外	14202	351	35° 20′ 11″	139° 30′ 56″	2023. 8. 16 ～10. 31、 2023. 12. 7 ～12. 28	420㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
陣出遺跡	社寺跡？、 集落、遺物 散布地	奈良・平安 ・中世		堅穴建物 4軒 土坑 3基		縄文土器、弥生土器、 奈良・平安：土師器・須 恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器、石製品、 金属製品 中世：陶器、土器 近世：磁器、陶器 近代：磁器、陶器		堅穴建物から石製 丸軀が出土。
要 約	本遺跡は今回初めて発掘調査された遺跡である。西側には柏尾川が南北方向に流れているが(南流)、本地点はその東側に位置する柏尾川の氾濫原からその北側の丘陵先端部にあたる。この氾濫原は、近世以前の柏尾川の旧流路も含んでいる。 発掘調査は上層と下層の調査に分けて行われた（下層の調査は上層の調査中にサブトレンチを入れて確認された）。上層の調査では奈良・平安時代の堅穴建物が4軒検出された（奈良時代が1軒、平安時代前期が3軒）。このうちの1軒は新旧2枚の床面があり、旧から新への床面は平面形はそのまままで盛土して構築している。竈も北壁から東壁へと付け替えている。この堅穴建物は新床面近くから石製の丸軀が出土している。竈は3軒の堅穴建物で検出されたが、方位は北、東、北東で一定しないものの、支脚は軟質砂岩の切石で、燃焼分は砂岩の切石を壁に埋め込んで補強している。下層の調査では、土坑1基（獣骨（馬か）1体分を検出）が検出されたのと、包含層を掘削した。下層の遺物は、縄文土器と石器、弥生土器、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・金属製品・石製品（砥石、火打石）・木製品が出土した。特に須恵器は堅穴建物では出土していない奈良時代のものも出土している。また、掘削した基本土層Ⅰ層からは中世～近代の陶磁器、土器が検出されている。概観すれば、本地点の主体となる年代は奈良・平安時代（前期）であるが、遺構は伴わないものの縄文時代、弥生時代、中世～近代までの遺物の出土がみられた。							

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

紙質 表紙 レザック66 四六判 175 kg
見返し 色上質紙 厚口
巻首・本文 マットコート A版 57.5 kg
印刷 FM スクリーン (AM400 線相当)

文化財保護・学術研究を目的とする場合は、著作権の
承認なく、この報告書の一部を複製し利用できます。
なお、利用にあたっては出典を明記して下さい。

鎌倉市 陣出遺跡

ー鎌倉市寺分字上陣出 393番の11外地点ー

発 行 鎌倉市

編 集 株式会社イビソク神奈川営業所

発行日 2024(令和6)年12月26日

印 刷 勝美印刷株式会社